

④5 角野栄子児童文学館（通称：『魔法の文学館』）新築工事

受賞機関 江戸川区

キーワード 公園との一体整備、魅力的な景観形成、
児童文学の素晴らしさを伝える

全建賞審査委員会の評価ポイント

国際アンデルセン賞受賞作家・角野栄子氏の世界観と児童文学の魅力を発信する施設が、江戸川区南葛西のなぎさ公園内に竣工。公園内の既存樹木を保存するとともに、丘を削り、建物を埋め込むことで、周辺に調和した外観や広がりのある豊かな内部空間を実現するなど、建築・造園・展示が一体的につながり、角野栄子氏の世界観を表現している点が評価された。

1. はじめに

『魔女の宅急便』などの作者として知られる児童文学作家・角野栄子氏は、幼少期から20代前半までを江戸川区北小岩で暮らし、幼い頃に見たり感じたりした江戸川の風景や河川敷で遊んだ体験などが、作品にも影響を与えている。角野氏は、35歳で作家デビューしてから数々の文学賞を受賞し、平成30年には児童文学のノーベル賞とも言われる「国際アンデルセン賞作家賞」を受賞した。区はこの偉業を称えて「区民栄誉賞」を創設し、記念すべき第1回の受賞者として角野氏を表彰した。

2. 事業の概要

角野氏の偉大な功績を広く伝えるとともに、未来を担う子どもたちがその世界観を体験できるような施設をつくることを目的とし、本事業が進められることとなった。児童文学館は、読む人に夢や希望を与える角野氏の作品を数多く展示し、子どもたちが児童文学に親しみ、豊かな想像力を育む場となることを目指している。

令和元年9月に基本構想を発表し、令和3年10月に着工、令和5年1月に竣工し、造園工事等を経て同年11月に開館した。



周辺に調和した外観

3. 事業の成果

文学館のあるなぎさ公園内には、四季折々の草花が咲き乱れ、春にはカワツザクラ、ソメイヨシノや130種のツツジ、夏にはあじさい、秋にはコスモス等を楽しむことができる。そのほか、区が誇るポニーランドやV6から寄贈されたオリーブの木（ブイロクの木）等の名所も揃っている。

文学館は、公園と一体的に整備され、バリアフリー動線やサイン計画を総合的に見直したことで、誰もが期待感を抱きながらランドスケープを歩き、児童文学の世界へと引き込まれていく環境となった。また、建物と環境に調和するよう設計された遊具や丸く剪定された木等、児童文学の世界を感じさせる仕掛けが盛り込まれ、建築・造園・展示の境界が曖昧となり、子どもたちの想像力や創造力を膨らませている。

文学館内は、丘の下の1階エントランスから入り、プロジェクションマッピング、展示や読書を楽しみながら上階へ進むと、3階には丘の上からの展望が望めるカフェがあり、カフェの客席やテラスからは園内の花々や旧江戸川を見渡すことができる。館内もバリアフリーとし、施設中央にエレベーターを設置することで、この一連の豊かな体験を誰もが楽しめるようになっている。



広がりのある豊かな内部空間

4. おわりに

開館から1年後の令和6年12月には、来館者が早くも10万人を突破した。小学校向けの団体誘致などの取組により、利用者アンケートでは、実に98%の方が「また訪れたい」と回答しており、リピーターが多いのも特徴である。

区を代表する人気スポットとして、今後も地域の活性化に寄与していくことが期待されている。

賛助会員 スターツCAM(株)